

2023年度

# 愛知の国語教育

(第59集)

## も く じ

I	はじめに	2
II	研究の経過	3
III	研究の内容	5
1	指導事例	5
2	第73次教研のまとめ	
(1)	読み方教育	9
(2)	つづり方(作文)教育	10
(3)	言語・音声表現の教育	10・11
IV	終わりに	11

愛知教職員組合連合会 教育課程研究委員会国語教育部会

2023年度 教育課程研究委員

◎部長 ○副部長

### ブロック推薦

名古屋			尾 張			三 河		
氏名	単組	分会	氏名	単組	分会	氏名	単組	分会
◎後藤佑介	名古屋	大須小	○仁科真由美	尾北	(江南)北部中	生駒大典	岡崎	六名小
○館純子	名古屋	汐路小	大館隆也	瀬戸	幡山東小	柴田美佐里	みよし	南中

### 第69次～第72次教育研究全国集会レポート提出者

第69次			第71次			第72次		
氏名	氏名	氏名	氏名	単組	分会	氏名	単組	分会
森川雄介	春日井	味美中	川嶋大介	名古屋	大森小	千田多久萌	尾北	(犬山)東小
蛭川義之	一宮	大徳小	小山和哉	豊田	竜神中			

第73次教育研究全国集会レポート提出者 江口 珠実 (尾北・犬山中)

緒方 涼子 (岡崎・竜海中)

## I はじめに

教育研究愛知県集会在、愛知県産業労働センターにおいて、盛大に行われ、ここに愛知の国語教育第59集をつくることができました。とりわけ、教育研究愛知県集会の正会員になられた先生方の真摯で熱意あふれる取り組み、その取り組みを支え、温かく励ましてくださった分会・地域の先生方や父母の方々に感謝いたします。

これまで愛知の教研活動(国語教育)では、目の前の子どもたちを見すえた実践を積み重ね、数多くの教育的財産を築いてきました。その中心となるのは、ことばの教育を通して、認識諸能力をのばしていく、つまり「人間形成を目的としたことばの教育」という考えです。

学習指導要領では、予測困難な時代を生き抜く資質・能力を高めるべく、「新たな学校文化の形成」「学校の意義」がとりわけ重視されています。また、より一層系統的に学習内容をとらえ、すべての教科のベースとなり、子どもたちにこれからの時代に必要な「ことばの力」を身につけさせることが肝要となってきます。一方で、子どもの「主体的・対話的な学び」の重要性や、学びの必然性や意義をふまえた授業構想、学習過程もこれまでと変わらず重要です。また、「個別最適な学びと協働的な学びの一体化」が、これからの教育には欠かせません。さらに、一人一台タブレット端末が本格的に導入され、ICT機器を取り入れた授業についても考えていかなければなりません。

しかし、教育現場においては、何とかよい授業ができないものかと、教員が日々悩みながら奮闘している一方で、言語活動が重視されるあまり、本来、活動を通して身につけさせなければならない「ことばの力」がおろそかにされている実態があります。また、教員どうしが、教育の理念や留意事項といった経験値を伝えるための時間や環境が乏しくなっているという現状もあります。

限られた時間の中で、深く、質的に高い学びを行うためにも、国語科の授業で何を行い、どう評価するのかという視点をもつことが大切です。

そこで、そのようなゆたかな学びにむけて、国語科として大切にしたい観点を以下のように考えました。

### ○「基礎・基本」

国語教育では、4つの領域と言語事項のそれぞれの学習において、特に言語活動を重視しながら子どもたちのことばの力を育成していく。「読むこと」の学習では、想像力を育むとともに、ことばが文脈の中でどう使われているのかを考える基礎となるべき語彙力を身につけさせたい。その学びをいかして、「書くこと」「話すこと・聞くこと」などの学習で、自分の考えを発信する基本的な力を身につけさせていきたい。

### ○「生きてはたらく力」

子どもたちがことばの学習を行う際には、学習の中心を担う言語活動の内容が、子どもたちの生活と密接に関係し、学ぶ必要感を感じられることが大切である。それが感じられれば、子どもたちは自然とその学習に魅力を感じ、自分自身で課題を見つけ、身につけたことばの力を活用して課題を解決していこうとする。そのためにも、教材と実社会や実生活とのかかわりに重点を置きながら、学習をすすめていきたい。

今こそ、新しい教育の時流をふまえつつも、不易と伝統にかかわる「守るべき部分」も新たな視点から検証し、教育課程を自主編成してきた過去の教研活動の実践に学ぶべき時なのではないかと思えます。

この愛知の国語教育第59集が、少しでもその役割を担っていれば幸いです。

## Ⅱ 研究の経過

### 1 読み方教育

#### (1) 文学的文章の読み方教育

ア 人間性と人間の生き方を探究する。	(人間の本質)
イ 現実に対処し、変革していく力をつける。	(社会の本質)
ウ 思考力、認識力を育てる。	(認識諸能力)
エ 豊かでみずみずしい感性を育てる。	(豊かな感性)
オ 日本語についての知識を豊かなものにする。	(言語的側面)
カ 文学を正しく鑑賞する力を育てる。	(鑑賞する力)

読み方教育がめざすものとして、上記の六つの目標が確認されてきた。そして、これらの目標を達成するための教材選択の視点として、次の3点があげられている。

- |                          |       |
|--------------------------|-------|
| ・ 作品の構造が緻密で、筋の展開に必然性がある。 | (形象性) |
| ・ 人間がいきいきと描き出されている。      | (思想性) |
| ・ 感動の質が高いものである。          | (教育性) |

この視点を具体的な文章で問い直し、自ら選んだ教材を見る目を育てていくことが大切であることが確認されている。また、選定した作品において、教材としての価値を具体的な表現にもとづいた言語面から明確にしていくことが求められている。

文学作品を「読む」ことを、作品の中に書かれていることば一つ一つを大切に、語句の意味、場面での使われ方、文と文とのかかわりなどから読み取れるイメージをふくらませ、「確かに」そして「イメージ豊かに」読んでいくことだと考える。イメージをことばにし、他者と意見の交流をしていくことによって、児童・生徒の頭の中に世界が明確に浮かび上がり、同時に作品のおもしろさ、豊かさが広がっていくはずである。

#### (2) 説明的文章の読み方教育

説明的文章では、「ことばと結びつけて認識諸能力を育てる」ことをねらいとしている。自然・社会・人間を含む現実についての認識を得させたり、現実のあるべき姿や現実の中の人間としての生き方を考えさせたりする過程で、ことばと結びついた認識諸能力(感覚・思考力・想像力など)をのばしていく。

そこで、このねらいを達成するための視点として、次のことが確認されている。

- |                                       |
|---------------------------------------|
| ・ 正しい認識の上に立ち、わたくしたちの生命を尊重する立場で書かれている。 |
| ・ 厳密なことば遣いで、論拠となるべき事実が十分に提出されている。     |
| ・ 段落構成が適切で、論理展開に無理や矛盾がない。             |
| ・ 児童・生徒を取り巻く状況や発達段階をふまえている。           |

説明的文章の中のことばや表現には、それに対応する事実や認識のあり方が存在する。そうしたしくみを読み取ることを通して、認識諸能力をさまざまに働かせ、表現されていることを具体化して考えることが大切である。また、教材を読む過程を通して、書き手の論を自分の考えと比較したり、自分の知識や経験に照らし合わせたりすることも大切である。さらに、内容の読み取りだけにとどまるのではなく、説明的文章を情報理解や構成、発信のモデルとして読み取らせていくことも求められている。特に、指導においては論理的な情報理解や発信のために、主張と根拠、意見と具体例、論理的な段落構成、表現上の工夫などの焦点化が望まれる。その上で、個性的で豊かな情報発信にむけての位置づけと評価を考え合わせていく。

## 2 つづり方（作文）教育・音声表現の教育・言語の教育

### (1) 何のために何を

愛知の教研では、これまでに「人間形成にかかわる側面と言語の技術的側面は、一体化してのばしうる」ことが確認され、認識と表現の統一をめざしてきた。知識ばかりをつめこんだ人間ではなく、心の発達の間でも調和のとれた人間を育てることが大切である。そのために、身の回りの自然や社会、人とのかかわりをいろいろな視点から見つめてものの見方を深め（認識する）、ありのままに書いたり話したりする力（表現する力）を高めていかなければならない。また、書いたり話したりする活動には伝える相手が必要不可欠である。「何のために伝えるのか」「誰に伝えるのか」といった目的意識や相手意識をはっきりさせるための手だてや支援の方法を考え、書いたり話したりする活動への意欲を高めていくことが重要である。

### (2) 何をどのように

#### ① 作文教育

作文は「事実を書く」ことが大切であると考え。昨今、人間関係の希薄さが叫ばれているが、今後子どもたちはより高度な情報化社会を生きていくことになる。事実とは、そのような子どもたちが日々直面する事実のことであり、「事実を書く」とは、子どもたちが身の回りの自然や社会、人とのかかわりをありのままにとらえ、自分とのかかわりをありのままに書くことである。また、書きたいことを整理するために思考ツールを用いることが有効である。自分の考えを広げたり、相手に伝えたい情報を取捨選択したりするための手段として使い、子どもたちがより豊かに表現することができることをめざしていかなければならない。

《選材・取材》	子どもが本当に書きたいことが価値ある題材になる。文の中に書き手の姿が表れるようなものにする。
《構想》	自分の書きたいことを整理し、構築するだけでなく思いを膨らませる。
《推考》	表現したいことが作文に表現されているかを読む。
《鑑賞》	互いの考え方の違いを知り、理解し合うことが認め合うことにつながる。

#### ② 音声表現の教育

音声表現は、文字言語にはない特性（即時性・断片性・流動性・集団思考性）を生かして「認識と表現の統一」をめざす。そのためには、話したり聞いたりすることによってものの見方、考え方、感じ方が深まるような実践を行わなければならない。話し合い活動を通して、自分の思いを場や状況に応じてきちんと伝えられる力、相手の言いたいことをくみ取って聞く力を培うことが重要である。それが、互いを認め合い、思いやる子どもを育てることにつながる。話し合いの内容を深めるためには、話さずにはいられない状況をつくる必要がある。また、思いや考えを引き出すには、楽しい活動をめざして、流動性（相手の反応に応じて表現することができること）を重視するべきである。評価は、それを子どもの成長にどう還元するかを大切に、「何のための評価か」を明らかにしなければならない。

#### ③ 言語の教育

文字・文法・語彙・発音などの言語教育では、「日本語についての科学的・体系的な知識を身につける」ことをめざしている。ことばの構造や体系を知識として一方的に教えるのではなく、発見の喜びや過程を大切にすることが重要である。そして、日本語の性質や体系を生かした指導法の工夫をすべきである。特に他国籍の子どもたちへの言語指導では、実態を的確にとらえ、語彙を増やすことや文の並び替えることなど、段階的な指導を意識していかなければならない。

### Ⅲ 研究の内容

#### 1 指導事例

研究主題 できる喜び、伝える楽しさを実感できる児童の育成

##### (1) 研究のねらい

コロナウイルスの影響で、マスクを着用する児童が増えた。実践を行ったのも、まさにコロナ禍であり、ほとんどの児童がマスクを着用していた。今後もマスクを着用した児童が多いただろうと予想し、マスクを着用した状態でも、自分の思いを相手に伝えられる表情や話し方の技能を高めていく必要があると感じた。

本単元「小学校のことをしょうかいしよう」は、3月に位置付けられており、来年度の新入生に小学校生活を楽しみにしてもらえるように経験したことに基づいて話すことを目標としている。本実践では、話す相手を児童の意見から家族と定め、「1年間の小学校生活で頑張ったこと」を話すようにし、次のような単元の流れを構想した。児童から主体性を引き出すために、3つの意識（目的意識、相手意識、価値意識）について考える「導入段階」。小学校生活1年間を振り返り、家族に伝えたい出来事を見つけて、書き表す「原稿作成の段階」。1回目のスピーチをもとに、上手なスピーチとはどのような姿なのかを考え、練習する「スピーチの段階」。スピーチを見た家族から手紙をもらい、自分の学びを振り返る「終末段階」。

本単元の中で、児童が達成したという経験を一つずつ積み重ね、自らの学びを実感するとともに、自分の思いを伝える技能を確実に高めていくことを願い、「できる喜び、伝える楽しさを実感できる児童の育成」をめざして、実践にあたった。

##### (2) 研究の方法

① 単元 小学1年「小学校のことをしょうかいしよう」 (東京書籍1年)

##### ② ねらい

ア 言葉には、事物の内容を表す働きや、経験したことを伝える働きがあることに気づくことができる。 (知識・技能)

イ 「話すこと・聞くこと」において、相手に伝わるように、行動したことや経験したことに基づいて、話す事柄の順序を考えている。 (思考力・判断力・表現力等)

ウ これまでの学習や経験で気づいたことやできるようになったことを生かして、話す順序を考え、紹介したいことを話そうとしている。(主体的に学習に取り組む態度)

##### ③ 手だて

・子どもの意識を引き出し、視覚化した上で、スピーチ練習の場や振り返りの場を効果的に設けることで、できる喜びを実感できるように以下の4つを設定する。

ア 単元の導入段階において、児童から3つの意識を引き出す

イ タブレット端末の利用

ウ 自分たちのスピーチについて振り返り、話し合う場の設定

エ 同パターンでスピーチの反復練習を行える授業展開の採用

・1年間の思い出を伝える場を設け、相手から感想を得られるようにすることで、伝える楽しさを実感できるように、以下の1つを設定する。

オ 1年間の思い出を伝え、感想を得られる場の設定

### (3) 実践の様子

#### ①導入 3つの意識を引き出す

単元の導入となる本時では、児童の主体性を引き出すことをねらった。まずは、「小学校に入学してから、もうすぐ一年が終わるね。この一年で、どんなことができるようになったかな」と問いかけることで、児童から「成長」というキーワードを引き出した。続いて、「この一年間で成長した姿を誰に知ってほしいかな」と問いかけ、自分の成長を伝える相手を具体的に考える時間を取った（手だてア）。さらに、「自分の一年間の成長を聞いた家族は、どんな気持ちになるかな」と問いかけ、この活動の価値に目が向くようにうながした（手だてア）。児童は目を輝かせて、うれしそうに家族が示してくれるであろう反応について考えて、盛んに発表し、そこで「こんなすてきな家族の姿を引き出すためには、どんなスピーチができればいいかな」と問いかけ、意見交流をしたところ、「家族にこの一年間の自分の成長が伝わるスピーチをつくりあげよう」という目的意識を明確にしていくことができた（手だてア）。

自わから挙手して発言することに苦手意識がある児童Aは、本時においてもやはり発言することはなかったが、相手意識について考える場面では「家族」に挙手をしたり、発言する級友へ体をむけてうなずきながら聞いたりするなど、授業に前向きに参加する姿を示していた。

#### ②展開Ⅰ 「上手なスピーチ」の観点を引き出す

発表原稿の作成後、初めてのスピーチの様子についてタブレット端末を用いて、撮影する場を設けた（手だてイ）。児童Aは、机の上に置いたタブレット端末に映し出されている発表原稿を凝視し、顔はずっと下にむけた状態であった【資料1】。視線が上がることなく、もじもじと体をよじりながら話すさまは、話すことへの恥ずかしさが勝ってしまっていることがうかがえた。また、声量も満足に出ず、マスクをしていることもあり、聴き取りづらい話し方であった。そこで、次時において自分たちのスピーチを振り返り、話す合う場を設け（手だてウ）、どのようなスピーチが上手といえるのか、児童の考えの中からその観点を定めようと考えた。



資料1 初めてスピーチした際の児童Aの様子

児童に「何ができていると上手なスピーチか」と問いかけ、「上手なスピーチ」の観点について児童の目が向いたところで、普段から大きな声ではっきりと話すことができていた児童Bのスピーチ動画を示し、「上手なスピーチ」についてより具体的に考えた。

児童Bは、聞き取りやすい声色でスピーチすることができた。しかし、今回はタブレット端末で撮影した動画を家族に見せる形式のため、声の大きさは音量調節することができる。そのため、スピーチの見た目が重要だということに気づかせたかった。そこで、「動画を見ていて、声が小さいときにはどうするの」と問いかけた。すると、「音量を大きくする」と答えた。そこで、「昨日の自分の動画を、音量をなくして見てみましょう」と働きかけた。動画視聴後に、どうであったかを問いかけたところ、「ふらふらしている」、「前を見ていない」、「口が動いていない」、「何を言っているのかわからない」など、児童の視点がスピーチの「見た目」に向かい、聞いている人に伝えるためには見た目も大切だという意識を引き出すことができた。ここで、改めて、「上手なスピーチとはどのようなものか」と問いかけた結果、「上手なスピーチ」の観点として、「口を大きく動かす」、「前（カメラ）を見る」、「よい姿勢」の3点が導き出された。

### ③展開Ⅱ 「上手なスピーチ」の3観点の技能をのぼす

児童が導き出した「上手なスピーチ」の3観点の技能をのぼしていくために、同パターンでの授業展開を考えた（手だてエ）。「口を大きく動かす」という技能をのぼすための授業では、初めて児童Aが発言する姿がみられた。今まで発言することがなかった児童Aを発言へと突き動かしたのは、練習を通して自分の成長が実感できたことで自信が高まったことに起因しているのではないかと推測される。

「前（カメラ）を見る」という技能をのぼすための授業では、「文を見るときには話さない」、「話すときには、前を見る」ということを共通理解した上で、一人読みに取り組んだ。児童Aは一人読みの段階から視線が上がり、カメラの向こう側にいる家族に伝えようとする気持ちが姿に表れていた。

「よい姿勢」という技能をのぼすための授業では、動作化を通して「よい姿勢」について考え、「肩を下ろす」、「固まらない」、「力を抜く」、「足をちょっと開く」という具体的な姿でとらえることができた。一人読み、その後の動画撮影では、自然と立ちあがってスピーチを行う姿がみられた。また、スピーチの撮影の際には、友だちと動画を見て、3観点について話し合う様子が自然と出てきた。そして、再度スピーチを撮影し、積極的に振り返る様子が見られた。

児童Aのスピーチは、前時の「前（カメラ）を見る」が上手にできていた。また、マスクを直す姿があり、「口を大きく動かす」も意識していることがうかがえた。さらに、本時の「よい姿勢」についても自然な立ち姿で、リラックスしている様子が動画から伝わってきた。1回目のスピーチのときのような、恥ずかしそうにもじもじとした姿は、全くみられなくなった。この姿から、技能の向上と、それを仲間に認められたことが自信となり、スピーチする姿として表出していることがうかがえる。実際に児童Aのスピーチを見た他の児童からは、「姿勢がよい」、「口が大きく動いている」、「カメラを見て話している」という意見が聞かれた。児童Aの振り返りの、できるようになったことでは「ゆっくりはなすことができるようになりました。」と書いてある。ポイントにはないことではあるが、ゆっくりと話すためには、落ち着いて伝えようとしなければならないと自分で感じ、考え、振り返りに記述したのであろう。

### ④終末 家族にむけたスピーチの収録と家族からの手紙

「いよいよ本番です。」と伝えると、「いやったあ」、「いえーい」などの声が教室にあふれた。児童の意欲が単元の終末段階でも持続していることがうかがえた。むしろ練習を積み、自分の上達を実感しているからこそ、さらに意欲が高まっているように感じた。

本番のスピーチを迎えた児童Aは、落ち着いて原稿に目を落としてから、顔を上げ、カメラを見つめて話し始めた。マスク越しの表情でも少し笑っているよう



資料2 児童Aの本番のスピーチ

にも見え、精神的な余裕が感じられた【資料2】。途中、口を大きく動かし過ぎたため、ずり下がったマスクを上げる仕草がみられた。1回目のときのような、恥ずかしがってもじもじする姿はなく、「上手なスピーチ」の観点を意識して話す姿がみられた。



## IV 第73次教研のまとめ

### 1 読み方教育

#### (1) リポートの概要

目の前の子どもたちの実態を見つめた価値ある実践が多くみられた。何のために、あるいはどのように読む力をつけさせるか、報告されたリポートをもとに、討論が展開された。

#### (2) 第73次教育研究愛知県集會に提出されたリポートの傾向

##### ① 読む活動を通して、どのような力を身に付けさせるのか

目的を明確にして、児童の主体性を高めようとする実践や汎用的な読解力の向上をめざす実践などが報告された。また、観点をしぼって生徒が作品を批評したり、動画を活用した導入や振り返りの活動から、作品に込められた思いを読み取ろうとしたりするなどの系統的かつ効果的な実践も報告された。討論では、児童の個別の読みに対する支援の方法や児童間のかかわりを促す手だてなどについて意見交換が行われた。

##### ② 読む力を高めるための教材の活用方法

教材の活用方法の一つとして、心情の数値化や構造の図式化をしたり、副教材を活用したりして主題に迫ろうとする実践などが報告された。討論では、副教材の提示のタイミングや教材の時代背景をどこまで、どのように伝えるかなどの意見交換が行われた。助言者からは、授業者の解釈を児童に押し付けないようにしつつ、書かれたもののみで児童に考えさせていくことの重要性について指摘があった。文学作品を読み取るうえで必要となる時代背景などの情報を提供する際にも、授業者の主観が入り込んでしまうことを意識し、慎重に行うべきだと助言があった。

##### ③ 読む力を高めるための指導の工夫について

正確に読み取りをすすめたり、読み取りの解釈を広げたりする工夫が数多く報告された。「プチ面白さ解説カード」や「ペープサート」による音読指導といった、視覚的に読み取ったことを認知しやすくしたり、ICT機器の共有機能や共同編集機能を活用することで効果的に交流をすすめたりする報告がされた。討論では、さまざまな手だてを活用する上での教員の投げ掛けや問い掛けが話題となった。ただ手だてを講じるだけでなく、どのように児童のモチベーションを継続させるのか意見交換が行われた。

##### ④ 読む力を高める主体的・対話的な学びのあり方について

主体性を育む上で有効な課題設定の仕方や円滑な対話を促すための班編成の工夫、対話を支援する教員の声掛けの方法などさまざまな実践が報告された。討論では、対話を深める上で必要となる知識・技能をどのようなタイミングで、どのように指導するか意見交換が行われた。また、対話で話題の中心になることの多い、文学的文章における主題について、児童から実際に提出されたものを検討したり、主題とはどのようにとらえるべきか話し合われたりした。

#### (3) 今後の課題

##### ① 物語の主題に迫ろうとする実践に対する、作者の意図と読者の読みの妨げにならないような指導の工夫

##### ② 深い学びにつながる評価基準の設定と児童独自の読みを保証する授業づくり

##### ③ 系統的な指導、ルーブリック評価を通して、国語教育で児童にどのような力を身に付けさせるべきか

## 2 つづり方（作文）・言語・音声表現の教育

### (1) リポートの概要

つづり方（作文）の教育5本と、言語の教育2本、音声表現の教育3本のリポートが報告された。目の前の子どもたちの実態を見つめて、どのような子どもを育てるのか、文字言語・音声言語のよさを生かして、どのような力を育てていくのかについて討論が展開された。

### (2) 第73次教育研究愛知県集會に提出されたリポートの傾向

#### ① つづり方（作文）の教育

〈何のために・何を〉

どのような学習発表会にするべきかをテーマに、自分の考えを意見文に書く実践や、資料を効果的に使い、調べたことを新聞にまとめる実践が報告された。討論では、説得力のある文章を書くために必要なことを、モデル文から気付かせることの重要性が確認された。

〈何を・どのように〉

子どもたちに学びを選択させる自由進度学習の実践や、思考ツールやICT機器を活用した実践などが報告された。討論では、子どもたちの学びを支えるためには事前の準備が非常に大切であることや、自由進度学習における教員の出方について話し合われた。

助言者からは、文章を書き切った後の推敲だけでなく、段階的に推敲の時間を設定することで、子どもたちの書くことへの意欲を持続させられることや、成果物だけでなく、活動の様子や毎時間の振り返りといった学習途中の子どもたちからも、実態を把握することの大切さについて助言を得た。また、子どもたちが見通しをもって主体的に学習をすすめられるように、評価基準を明確に示すことが必要であるとの助言を得た。

#### ② 言語の教育

〈何のために・何で / 何を・どのように〉

子どもが主体的に学習に取り組むことができるようにするための手だてや支援の方法について話し合われた。語彙の量を充実させるために「ステップアップ表」として学習方法を提示したり、語彙の質を高めるために「チェックリスト」を活用して自分が書いた文を見直す活動を行ったりすることで、自ら語彙力を高める子どもを育成する実践が報告された。また、授業の中で対話を積極的に取り入れたり、振り返りシートの内容や活用場面を工夫したりすることで、子どもが考えの変容や深まりを実感できるようにする実践が報告された。

討論では、帯学習を設定し、子どもが継続して学習ができる環境を整えることや、より深い学びを生み出すために教員のファシリテーション技術を向上させることの重要性が確認された。

助言者からは、授業の終わりに振り返りを書く習慣は必ず必要であり、それを書き溜め、次時以降へつなげていけるとより効果的であるという助言を得た。

### ③ 音声言語の教育

〈何のために・何で / 何を・どのように〉

自分の思いや考えを言葉で相手に伝えることができるようにするための手だてや支援の方法について話し合われた。

子どもたちが効果的な表現方法に気づき、自らの表現に生かすことができるようにするために、4人組の少人数で意見交換を繰り返し行いながらスピーチや作文を完成させる実践が報告された。また、自分の思いや考えを論理的に表現することができるようにするために、ICT機器で思考ツールを活用した実践が報告された。

討論では、子どもたちに相手意識や目的意識を明確にもたせることで主体的な学びを生み出せること、そのためには題材や単元の導入の工夫が必要であることが話し合われた。

助言者からは、子どもたちに「やらされている」という思いをもたせないためには、日常生活から上手く題材を与える必要があるとの助言を得た。

### (3) 今後に残された課題

- ① 子どもに具体的な完成イメージをもたせるためのモデルの提示
- ② 子どもどうして評価し合うための評価基準の設定
- ③ 「文字を紙に書く」という時間の設定

## V 終わりに

今回行われた第73次教育研究愛知県集会（国語教育）では、提案レポートを中心とした熱心な討論が行われた。一つ一つの実践が、先生方の熱意あふれるものであり、今後の愛知の国語教育をさらに推進していくものだと感じられた。本年度の実践も、子どもたちの力をのばしたい、よりよい授業にしたいとの思いをもって積み上げられた実践ばかりであった。教員は、目の前の子どもたちが、授業でつけた力によって、どのような人生を送っていきけるのかを思い描く。そのために、子どもたちの課題を把握し、どんな教材で、どのように指導するのかを追究する。それが、教研の実践のあり方である。そこに教科書があるから授業をするのではなく、そこに子どもたちがいるから授業を行う。目の前の子どもたちの姿を見つめ、どのように国語の力をつけさせ、それによってどのような子どもに育てていきたいのか。そのような願いがあつてこそ、授業は確立していくものだと考える。

本年度、「文学・その他」「作文・その他」どちらにおいても、認識力を育てるための指導のあり方、そして、国語教育で身につけさせたい資質・能力、という点が討論の中心となっていた。それぞれの実践が、相互に補完し合うことで、国語教育の一つの目標である「認識と表現の統一」が、より円滑に行われていくと考える。

わたくしたちこそが、子どもを目の前にしている教育者なのだという思いを強くもちながら理論と実践を深め、豊かな教育をさらにすすめていきたい。今後も教研の実践が、愛知の国語教育の発展に寄与することを願う。